事を執するも もとこれ迷い
理にかなうも また悟りにあらず

「江戸こばなし」にこんな話があります。

夕方のおつとめのお経のあと、弟子たち四人が申し合わせて明朝の明け方まで「無言の行」をすることになりました。

一番若い小僧さんは、灯の油の補給係。残る三人のうち一人は長老と呼ばれる指導役で、他の三人とともに坐禅をくみ、この行を行います。

やがて合図の鐘が鳴り、一瞬堂内シーンと緊張がみなぎり、各自それぞれの位置で「行」に入りました。

夜はしんしんと更けてゆく・・・・

そのうち、どうも油がきれたらしく灯が点滅し、やがて消えかかる。

「あっ！灯が消える。」すると隣で「無言の行に口をきくやつがあるかっ！」と、これは兄さん弟子。これを黙って聞いていた長老さん、おもむろに口を開いてこう諭されました。「おまえたちは駄目だ、ものを言わないのはこのわしばかりじゃ！」と・・・。

すると、お堂の横に座って、うとうと居眠りしながらも油の少なくなるのを待っていた一番若い小僧さん、あわてながら、声を出さないようにと、こわごわ油の補給をした・・・とか。夜明けにはまだ遠いころ・・・

私たちが日ごろ目先の損得を追い求め、右往左往するのは、もとから迷いの真っ只中にいるといえます。また、いくら学識があり、人の世の善悪の理をわきまえていても、それにもとづく実践がなければ、これも悟りをひらいているとは言えません。

この江戸こばなしは、実践の難しさをユニークに言いあてています。表題にあります禅の語録、『参同契』の文言は、情報にあふれる現代にこそ心にとめていただきたいことばです。

事を執するも
もとこれ迷い
理にかなうも
また悟りにあらず
―参同契―

曹　洞　宗

神奈川県第二宗務所
第五教区　布教部・出版部

解説

『参同契』は、五言四句二二〇字をもって仏教の要点を説いた宗典です。著者は、中国における禅宗の初祖・菩提達磨大師より八代目の祖師石頭希遷禅師(唐代、七〇〇～七九〇)です。曹洞宗では、宗要を説いた大切な教えとして珍重し、『宝鏡三昧』とともに日常読誦されています。

「参」は現象世界のすべてが区々別々であること、「同」は万物は個々にありながら同じ法に包まれて平等であるということ、「契」は両者の契調融和すなわち不二を示します。

『参同契』の題号それ自体が『参同契』の本文全体の意を説き、また仏教の要点をズバリ説いていると言われます。本文の最後は、「光陰、虚しく渡ることなかれ」という文言で結ばれています。

本経は、仏の教えを日常生活のさまざまな一挙手一投足の中で、時々刻々と行じていくことの大切さを説いた仏典であります。